

一皿に込められた感謝の気持ち

岡崎文化協会 会長

浅井 克彦 氏



教育隨想



平成21年12月1日

12月号

発行・編集
岡崎市教育委員会

一九九二年、スロベニアで世界人形劇フェスティバルが開催された折、知立山車文楽は山車からくりと共に招待公演に招かれました。その帰途、イタリア・ジエノバで開催中の国際船と海の博覧会に立ち寄り、愛知万博の宣伝を兼ねて山車文楽は『伊達娘恋の紺鹿子』を上演しました。

イタリアで旅の最終公演を終えた翌日、多忙な日程の中、せめてイタリアのスペツティをと思い、海の見える丘に一軒の店を見つけて、惑わずにへ本場イタリアへの spa を注文しました。東洋系の顔つきをした十代のウエイトレスが、見事な手さばきで一気に数人前の皿を運んで来ます。ところが、彼女、今度はたつた一枚の皿を大切そうに捧げ持ち、語りの I さんに運びました。決して

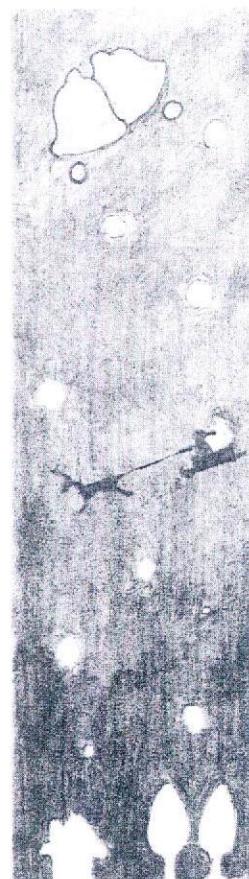
私が最後の一皿ではないのにです。私は通訳を通じて「なぜ一皿だけ I さんに別に運んだのか」と尋ねたところ、「私は、昨日博覧会であなたたちの文樂を觀ました。言葉は分からぬけれど、彼女の語りや三味線で、『お七』の心が良く伝わってきました。そして今、目の前にその語った人がいるなんて夢みたいです。でも、私には感動をいただいた感謝の気持ちを伝える術がありません。そこで咄嗟に思いついた事は、私たち心をこめて丁寧にあの方のお皿を運ぶことが出来る。私はそう考えて

スロベニアに世界中から集まつた数百人の人形劇のプロたちの拍手に感動した I さんでしたが、イタリアのたつた一人の少女の行為は、それにもましての大感動だったのです。

言葉が通じなくても、心の内を素晴らしい形で表現出来る彼女に、演出者として同道した私は脱帽でした。勿論 I さん以上に感動もいたしました。

(あさい かつひこ)

教育隨想	1
岡崎文化協会 会長 浅井 克彦氏	
この人に聞く	2
宇野病院 リハビリテーション部 部長 藤野 宏紀氏	
羅針盤	2
岩津小学校長 江坂 良夫	
ふれあい	3
豊田市立足助中 柴田 明美	
特集	4
地域の史跡を教材に ～旧東海道を巡る～	
お知らせ	6
フォト・ヒストリー	8
中学校入学式への出発式 (昭和36年)	
この本を	8



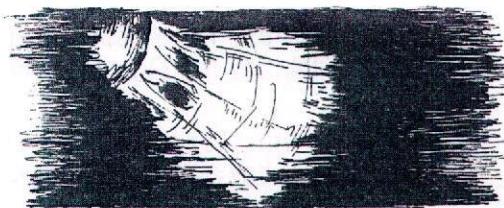
院で働いていたが、この先どうしてい
手術のできない外科医として、病
院で働いていたが、この先どうしてい
たのですが、五年目ぐらいに、脊髄の
病気になって、手術ができなくなりま
した。車いす生活になり、いろんなこ
とにネガティブになっていました。

「医者としてのスタートは外科医だっ
たのですが、五年目ぐらいに、脊髄の
病気になって、手術ができなくなりま
した。車いす生活になり、いろんなこ
とにネガティブになっていました。」

ふるさとシリーズ この人に聞く 楽しく生きるために

宇野病院
リハビリテーション部 部長
藤野 宏紀 氏

ふるさとシリーズ この人に聞く



こうと悩んでいたそうである。

「こんなふうに悩んでいたら、楽しく
生きられないなど、感じたのです。」

そこで高校・大学と続けたバドミン
トンを六年ぶりに始めた。平成十三
年、障がい者バドミントン教室に誘わ
れ、半年ほど練習した。

「いきなり出場した『日本障がい者バ
ドミントン選手権大会』で、シングル
ス三位、ダブルスで優勝してしまいま
した。しかし、簡単に結果が出て、
あまり感動を得られず、やめてしまい
ました。」

平成十五年九月、外科医からの転
身を目指し、藤田保健衛生大学のリハ
ビリテーション科で働くことになる。

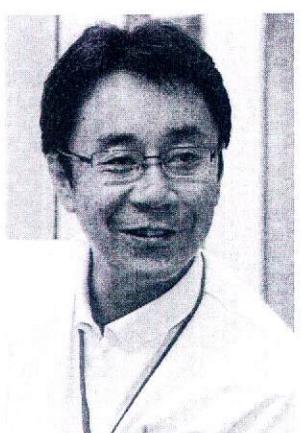
リハビリ医としての研修が始まった。
「大学勤務はとても多忙で、バドミン
トンは全くしていませんでした。」

三たびバドミントンを始めるきっかけ
になったのは、宇野病院勤務を始めた
平成十九年。

「患者さんの一人が、名古屋の障がい
者スポーツセンターで行われているバ
ドミントン教室のこと教えてくれま
した。どこかでわたしの名前を聞き
て喜んでくれました。」

九月上旬、韓国で行われた「世界
障がい者バドミントン選手権大会」に
日本代表として出場した藤野さん。

「医者としてのスタートは外科医だっ
たのですが、五年目ぐらいに、脊髄の
病気になって、手術ができなくなりま
した。車いす生活になり、いろんなこ
とにネガティブになっていました。」



氏名 ふじの ひろき
生年月日 昭和四十年一月三十日
住所 名古屋市名東区

けて、ぜひ来てほしいと誘つてくださ
ったのです。」

六年前に出場した選手権大会が、
また名古屋で行われることで、
迷つてはいたが、ぎりぎりで出場のエ
ントリーをしたそうである。六年ぶり
のバドミントンとの再会である。

「何と、このときは一回戦敗退でし
た。」

この敗戦が、藤野さんの闘争心に
火をつけたのかもしれない。

「勝つことや、つらい練習をみんなで
乗り越えるというのは、やはりいいも
のです。実は、バドミントンをする
ことで、腰痛も治つたし、元気になり
ました。」

笑顔で語る藤野さん。

最後に、今後の夢を語つてもうつた。
「バドミントンでは、十二月の日本選

手権で上位入賞して、来年のアジアの
パラリンピックの日本代表になりたい
ですね。仕事では、病院に新しくでき
る新棟のリハビリ施設を充実させたい
と考えています。リハビリはチーム医
療ですので、いろんな人の意見を出し
合つて作つていこうと考えています。」

今も、日の出と同時に、自宅近く
の坂で毎朝トレーニングを続ける。仕
事にもバドミントンにも、人生を楽し
もうとする思いで取り組んでいる藤野
さんであった。

事前にそのノウハウを学ばせるなど
だけなら、そうした配慮も必要かも
しれないが、経験がないからこそ、
事前にそのノウハウを学ばせるなど

為すことによつて学ぶ

岩津小学校長 江坂 良夫

先日、少年自然の家で山の学習を
実施した。こうした野外学習では、
どこの小学校でも飯ごうによる炊飯

活動を行つてゐると思う。自然の家
では、水場なども整備され、活動し
やすくなつてゐる。しかし、活動の
様子を見ていると、ずいぶん様変わ
りしてきたことに気づく。マッチが
うまく使えないからライターを使用
する。朝食のご飯やみそ汁の代わり
にホットドックにする。これは、時
代の流れと共に生活様式が変わり、
マッチなど実際の家庭生活では使つ
たこともない子供たちへの配慮なの
だろう。そこにある施設を利用する





生きる希望

豊田市立足助中

柴田 明美

A子は、小学校四年で両親の離婚を経験した。思春期になつて強まる両親からの疎外感。同居する父方の相母とのいさかい。妹、弟の世話への疲れ……。中学校に入学した彼女に大きな負担がのしかかった。

「先生、怒らないで。ごめんなさい、またやつちやつた……。」

「話したいことがある」と言つて、部活動の時間に学習室に残つたA子は、沈黙の後、左腕を押さえながらかすかな声でそう告げた。

昨年度、学校を振り回した自分の靴に画びようを入れる事件に始まり、自身への脅迫状に至るまでの自虐的行為は、今年も続いている。

A子の苦しみを少しでも受け止められるよう、教職員で連携して対応

を続けているので、何とかA子は登校できている。卓球部の仲間とのつながりを絶ちたくない彼女の思いを尊重し、今年はマネージャーとして、学校での居場所ができるようにした。

本校は、今後の地域の発展を念頭において総合学習に力を入れている。その一環として、二年生の夏休みに、連続五日間の職場体験学習「あすけチャレンジWEEK」が行われる。生きる目標をもてずにいるA子について、その体験学習を意味のあるものにしなければと考えていた。

A子は、当初、保育関係の仕事に興味を示した。しかし、A子が慕う母方の祖母が介護士であることに着目し、A子の思いを大切にしながら話し合いを重ねた。そして、希望の中の一つ、高齢者介護施設で体験できるようにした。祖父母と曾祖母と暮らすA子は、それが今後の生活に生かせることを予感していた。

素直な態度を励ますことで、自信をもつて活動できるようにした。

体験を重ねながら、A子は日ごとに積極性を高めていった。最終日に学校に来たA子は、走り寄つて、こう言つた。

「先生、私、老人介護のボランティアがしたい。できますか。」

入学して以来、彼女の口から「〇〇がしたい」という言葉は、一度も聞いたことがなかつた。何をするに

も嫌々で、すぐに逃げてばかりのA子が、目を輝かせながら言つたのだ。

「できるよ。どうしてそう思った。」「なんか、自分を必要としてくれてるなつて思ったから。」

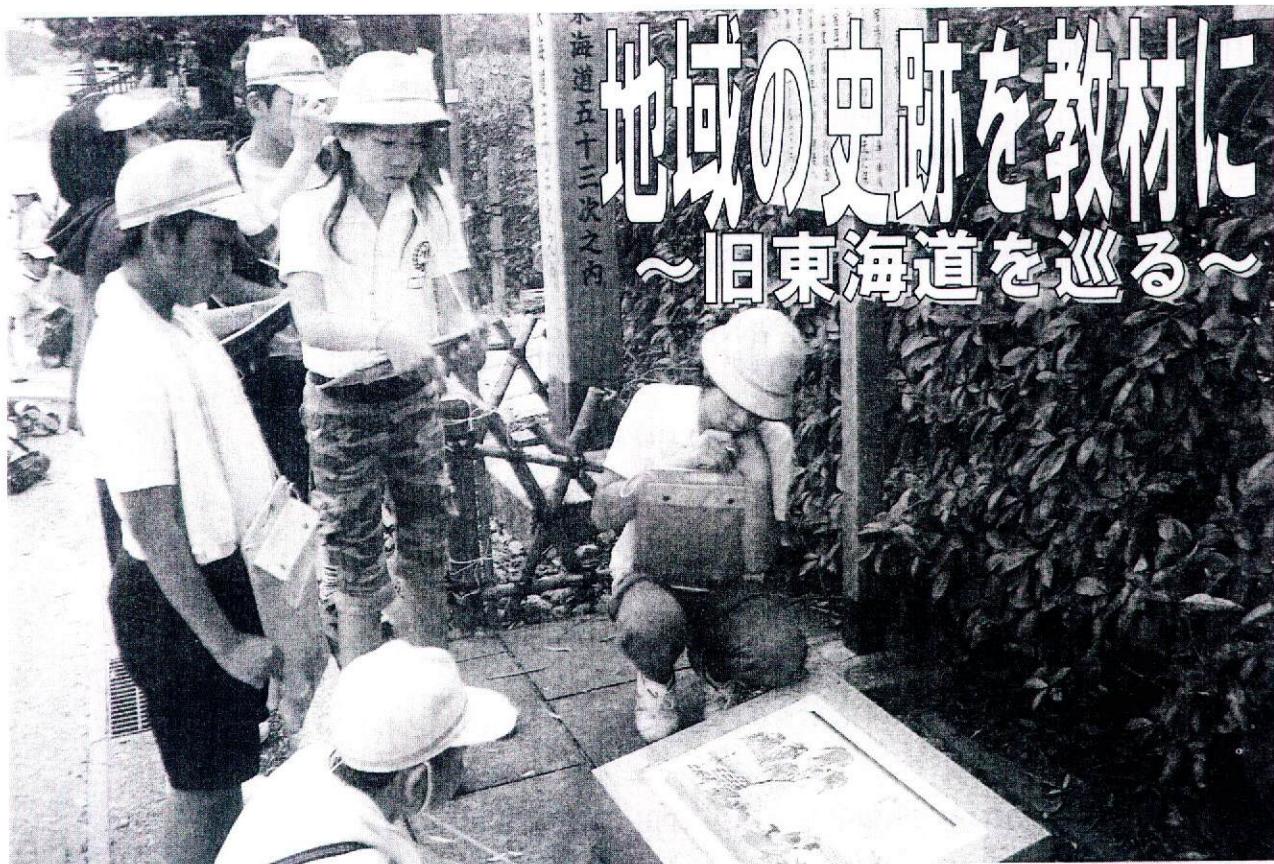
深く考えながら、A子ははつきり答えた。実習日誌に、「また来ててくれる日を楽しみに生きとるでね」と言われて鳥肌が立つた。私は、この人に生きる希望を与えた」と書いたA子。自分の存在意義を実感できた彼女の言葉は力強かつた。

普段課題を出さないA子が、「お世話になつた方の紹介パンフレット」を、時間をかけて作り上げた。祖母とのいさかいも確実に減つている。

A子のこの出会いを、彼女のこれから生きる活力にしなければ。A子に、私もやる気をもらつた。



新学習指導要領の小学校理科の目標に、「実感を伴つた理解」という文言が付け加えられた。これは、自然観察などの体験活動を重視することであり、そこから充実した探究学習へと発展させることができる。このことは、理科に限らず、他教科にも通ずることである。幸いにして、岡崎市は、自然や歴史・文化の面で格別に恵まれている。目の前にある教材を淡々と消化していくのではなく、学校の中だけでは学ぶことのできない新鮮な学習体験をさせるためにも、まずは、教師自身が積極的に情報を収集し、新たな教材の発掘に努めてほしいと思うのである。こうした学習体験が、ふるさと岡崎を愛する心をはぐくみ、ふるさとの自然や環境を守る活動へと発展していくことにつながっていくのだと思う。



▲社会科の授業で藤川宿の入口、東棒鼻を調査（藤川小）

岡崎市には、このように古くからの史跡や文化財が豊富にある。地域の史跡を教材化し、岡崎の子供に郷土を愛する心を養っていきたいものである。

岡崎市には、このような古くからの史跡や文化財がある。地域の史跡を生かした取組が、多くの学校で行われている。江戸時代の地域史の学習の一環として二十七曲りを取り上げた社会科の授業、地域の文化財調査の一環として旧東海道の調査活動を行う総合的な学習の時間や選択の授業、また、学年や学級ごとに、ウォークラリー形式や遠足で二十七曲りや旧東海道を歩くなどの行事を行っている学校もある。

現在でも、古くから残る史跡が市内には数多く存在している。特に、欠町から伝馬通を経て八帖町、矢作橋へとつながる二十七曲りは、十七世紀に田中吉政、本多康重の二人の城主によって整備された特徴的な街道である。この二十七曲りは、防衛上の必要性だけでなく、道を長くして商店を増やし、経済効果を高めようとする意図もあったと言われている。また、市東部の藤川宿も、東西棒鼻や脇本陣跡などが復元され、二十七曲りなどとともに町並みや歴史、生活文化をたどる観光資源として注目を浴びている。

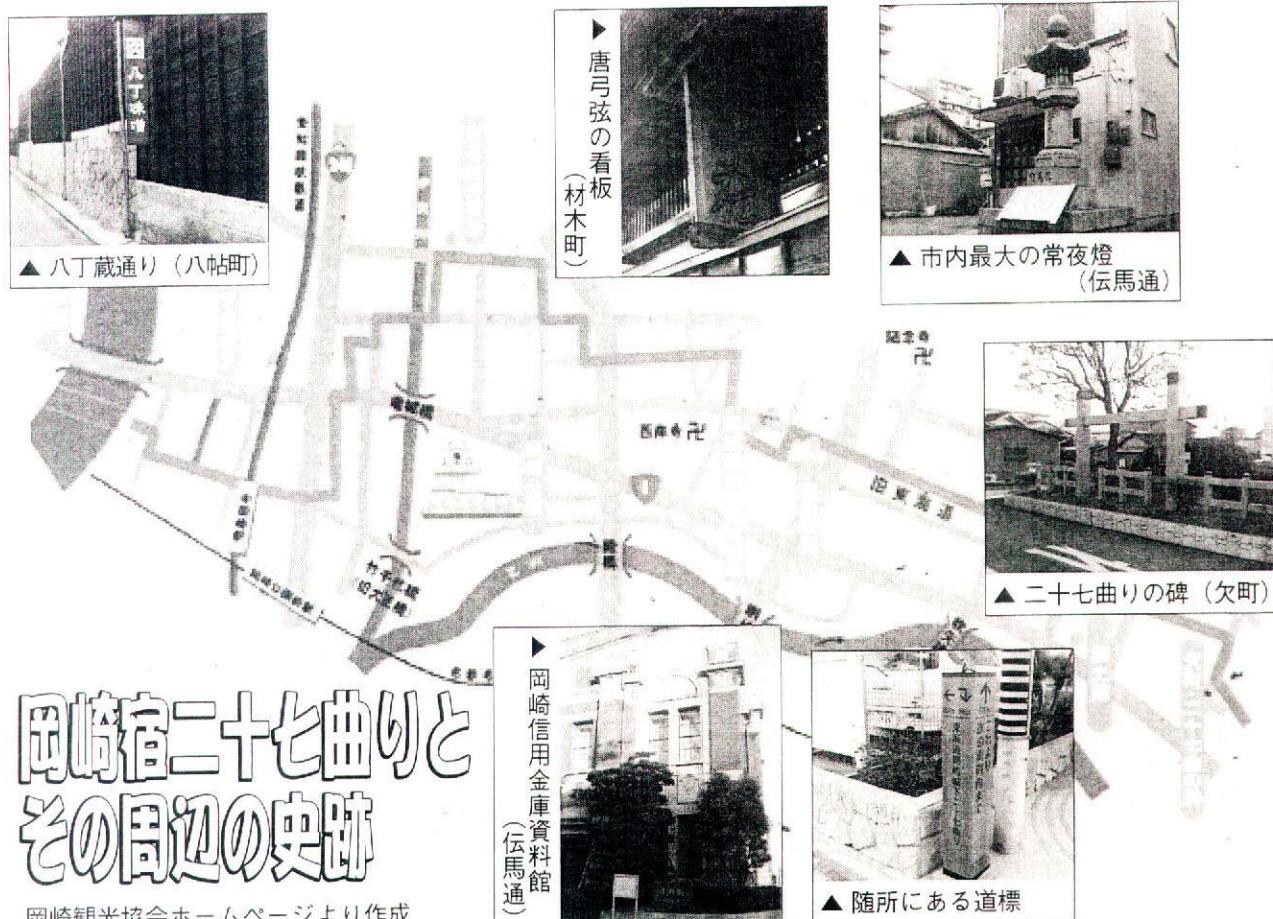
このような地域の貴重な史跡を学習に生かした取組が、多くの学校で行われている。江戸時代の地域史の学習の一環として二十七曲りを取り上げた社会科の授業、地域の文化財調査の一環として旧東海道の調査活動を行う総合的な学習の時間や選択の授業、また、学年や学級ごとに、ウォークラリー形式や遠足で二十七曲りや旧東海道を歩くなどの行事を行っている学校もある。

岡崎市は、徳川家康生誕の地である岡崎を中心いて、城下町として発展してきた。また江戸時代には、東海道が岡崎城下を通り、岡崎宿、藤川宿の二宿が置かれ、宿場町としても栄えた。



▲選択授業で旧東海道大平一里塚を見学（美川中）

▲教科・領域基礎研修会（社会）で二十七曲りを見学



二十七曲りに触れる学習活動

外部講師を招いて二十七曲りを巡る学習（根石小）



総合学習での「二十七曲りウォークラリー」（連尺小）



梅園小での授業の流れ

一 伝馬通りを歩いて、古いものを見つけよう。

二 今でも残る江戸時代を発見しよう。

三 二十七曲りに隠された秘密を探せ。

四 田中吉政は、なぜ二十七曲りを作ったのか。

五 田中吉政が考えた二十七曲りは、岡崎城下町にとつてどうスダつたのか。

六 二十七曲りについてもつと知りたいことを、学芸員の堀江先生に聞いてみよう。

成長 成長



▲二十七曲りを扱った6年生社会科の授業風景（梅園小）

(5)

● 表彰

●ハートピアだより

動したり、部屋の中では□数の少ない子も開放感からか、自然の中ではいろいろな話をしてくれたりします。

十月二十三日(金)には、「少年自然の家」でディキヤンブを実施しました。当日は天気も良く、四、五名のグループでカレーライス作りをしました。小・中学生が一緒にになっての炊飯活動は初めての経験でしたが、中学生のお姉さんやお兄さんが中心となり、みんなで相談しながら楽しく活動を進めている姿が見られ、一人一人の良さを見つけることもできました。

今後も、こうした自然の中で遊びのびと活動できる場を大切にしていきたいと思います。

・カ
ツ
ト
竜南中
川上美里

中学校入学式への出発式 (昭和36年)

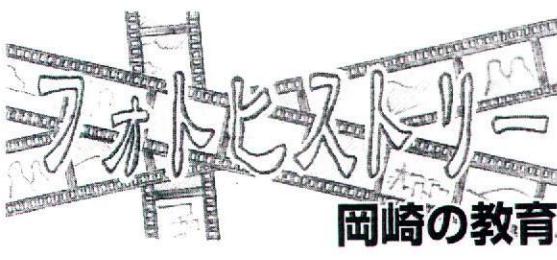
写真提供：大雨河小学校

写真は、昭和三十六年から始まった中学校入学式への小学校での出発式風景である。小学校の新任式・入学式・始業式の翌日が中学校の入学式。当日の朝、運動場で出発式を挙行し、在校生全員が卒業生の中学校入学を祝う。

卒業生は、真新しい中学校の制服に身を包み、新品の自転車でさつそと小学校を後にする。出発する中学生の顔も、送る小学生の顔もはつらつとしている。

記録によると、小学校長が中学校まで引率したとある。

小学校の校庭に七学年が集合し、先輩から後輩への文化の受け渡しが成される行事の一こまである。

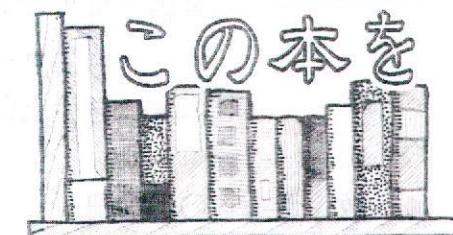


思いは世界へ。だれもいなりハビリ室で、トレーニングに励む藤野さん。勝利を目指すひたむきな姿の一方で、「患者さんから教えられることが多い」とも。医師として、アスリートとして、楽しみながらハビリやスポーツに取り組む姿に、患者さんも深い信頼を寄せるのだろう。

深深と雪の降る夜は、最近めつきり少なくなった。暖冬のせいか。国内外で大きなエンジンのあつた一〇〇九年。気象も含めて地球規模で大きく変化している。しかし、我々にとって不易なものも必ずあるはずだ。来年はどんな年にしたいか。大事に守つてきたいものを考える年の瀬である。

**シ
オ
ス
ア**

住み慣れた街、岡崎。家康のふるさと、この岡崎を、城下町として発展させたのが、秀吉の家臣、田中吉政であった。という事実に奇縁を感じる。自分の郷土について、まだまだ知らないことが多い。一度岡崎の街をゆっくり歩いて、文化や歴史の匂いをたっぷりと感じてみたい。



*日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか

古荘 純一 光文社新書 ¥800
*人生の歩き方 塩沼 亮潤 致知出版社 ¥1,400
*授業の研究 教師の学習 秋田喜代美他 明石書店 ¥2,500
*半島へ、ふたたび 蓮池 薫 新潮社 ¥1,400

*建築家 安藤 忠雄 安藤 忠雄
新潮社
¥1,900

建築と教育、一見無縁に思えたが、光と影のある写真（荒木経惟撮影）と、子供のための建築を手がけた作者の、「とりわけ子どもには、自分たちの居場所が探せる、ほったらかしの場所が必要だ。」という言葉が印象深かった。授業と、知恵をはぐくむ放課後の自由な時間、この両方があつてこそその教育であろう。著者が独学で建築を志し、小さな希望の光をつないで必死に生きてきた姿に引きつけられる。代表作「府立近つ飛鳥博物館」をじかに訪ねたくなつた。

井田小 柴田 秀夫